

ワンが駄場～酒井明 説話集23※～

オヒツ、シャモジやオワン。若い人たちの中には分からないものもあるのではないのでしょうか。どれも三度の食事と切り離すことのできないもので、オヒツなんかは最近ジャーなるものにとって代わられたといえましょう。

ソウケやメゴ、そんなものも以前のものは姿を消しましたが、みんな木や竹、山のシダなどで作られて、本当にきれいな細工でした。

今から思えば、工芸品並みなものを日常生活に使っていたといえましょう。

去年のこと、一生原、おももの川を訪ねた時、ワンが駄場の地名が出てきました。早速古老の話を聞いてみると、ワンが駄場周辺は食器のオワン作りの原木があって、それを切り出していた所だそうです。

国有林の真ん中に、なんでも三原の人の所有林があり事業所までの道をつける時はその人に断わってつけたというが、どうもその山主たちが長年その辺から材料の切り出しをしていたという話でした。

残念なことに、ここで使った材料が何の木だったのか確かなことは分かりませんが、福島県の山間部などは、昔からシャモジ作りの盛んな所だったそうですが、ほとんどブナの木を使っていたということです。

生活必需品ですから、恐らく近辺でも作られていたのだろうと考えていたのですが、やはりその可能性は充分ということになりました。

職人さんたちは、生木か、水に浸けた木でないと乾燥して細工ができにくかったということから、山にこもって作っていたと思われませんが、当時この一帯は熊の巣だったことから、あるいは里まで出して作っていたという方が当たっているのかも知れません。

木によっては、乾燥したものを使って割れるのを防いでいたのかも知れませんが、その辺のことも今では十分な拠り所になる様な話を聞くことは無理なようです。

もし手がかりになる様な話を知っておいでの方は教えてください。

山や海を回っていると、知らなかった色々なことを知ることもできて本当に楽しいものです。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。

